The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	電脳山田村への道
Author(s)	小松, 裕子; 小郷, 直言
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 1997, 105, p. 19-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/66224
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特 集 3

電脳山田村への道

小松裕子　　小郷直言
高岡短期大学産業情報学科　大阪大学経済学部
ykomatsu@takaoka-nc.ac.jp　kogou@econ.osaka-u.ac.jp

毎年春から夏にかけて、オフィス街では就職活動で忙しいスーツ姿の学生を多く見かける。彼らが晴れて来春めでたく希望の会社に入社したあと体験する大きな生活上と心理上の変化はたぶん大きなものであろう。しかしながら、新社会人は大体は大過なく、ある時間をかけて徐々に「適応」していっているようにみえる。若い人の持ち前である柔軟性が大いに関係しているとは思われるが、それだけで切り抜けられるはずはない。企業側の努力も大変なものがあるはずである。研修やＯＪＴ（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）、協働（cooperative work）などによって、学校教育とはまた違った教育支援の仕組みが用意されて、新人に対するケアが万事施されている。企業側がこのようして新しい経験をする人たちにソフトランディングを可能にしていることを忘れるべきではないだろう。

実は上記のことは学校から職場へという移動がその人の環境を劇的に変化させたために起こってたのである。以下で報告する事態は一つの村に新しい情報技術が大量に導入されて、その生活環境に大きな変化を与えたのであるが、その変化に村民とその支援者がどのように対処しようとしているかという、未体験のまだ現在進行形の過程である。企業がもつ新人教育のためのノウハウを村は今のところもっているわけではない。そこで村は暗中模索のなかで果敢にも様々な取り組みを行っている。ここではその一部を紹介することにする。

１．電脳村への序曲

平成８年になり、富山県の小さな過疎の村が日本中に知れわたるようになった。その村の名前は山田村という。平成７年に国から情報モデル地区として指定を受けたためである。富山県婦負郡山田村は、スキーといで湯の里をキャッチフレーズに観光と農業を主な収入源としているが、村民わずか約２０００人で、およそ４人に１人が６５歳以上という高齢化の進んだ過疎の村である。

写真１　山田村の入り口
スキーといで湯の里の看板が見える

その村の全戸４８０世帯の約７割にあたる３２０世帯に、村役場からテレビ電話機能つきパソコンがほぼ無償で配布された。各戸がネットワークで接続され、村ぐるみでインターネットを利用しようという、地域情報化の先進的なモデル地区に突如変身したのである。公式的にいえば、山田村が情報化モデル地区に選ばれたの

は、明らかに今後より深刻になると考えられる高齢化社会と過疎の村という二重の重荷を背負った「村」に情報技術が何らかの福音となるかを先行的に調査したいという行政サイドの思惑もあったはずである。

山田村の７割の家庭にパソコンが配付された平成８年夏からほぼ１年が過ぎ、村は当初の喧噪から少し落ちつきを取り戻したように思われる。しかし、今なお調査や視察のための訪問や問い合わせは相変わらず多い。しかも、一時ほどではないにしても情報発信の震源地としての注目度はいまだに高い。この夏には、村民と学生ボランティアの共催による「電脳村ふれあい祭り」が企画され、ますますの盛り上がりを見せている。（ホームページ参照：http://www.nisiq.net/~sepia/index.html）

１．１　山田村概況

富山県婦負郡山田村は，富山県の南西部に位置し、標高１００～１０００メートルの山峡にある。富山市から車で約１時間で、総面積４０９２ha，４０％程度が急峻な山地を占める以外は，丘陵性の地形であって，山田川・赤江川・和田川の両岸に散在する２３の集落で形成されている。１２月中旬から４月上旬までの約４カ月が積雪期間である豪雪山村であり、農林業と観光を主体とした村であるが、近隣の市や町で働く兼業農家も増えている。現地に行ってすぐにわかるのは、村全体の電脳化が構想された理由の一つに、山間に点在したこの２３もの集落を何とか結びつけたいということがあることである。

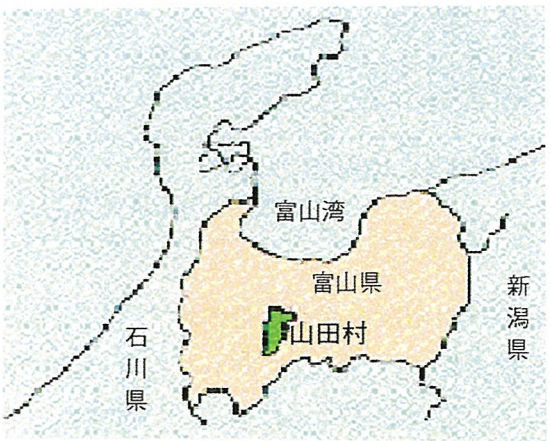

図１　富山県婦負郡山田村の位置
（山田村パンフレットより）

１．２　インターネット導入の動機と過程

平成７年（1995）春、山田中学校教諭から「生徒にパソコン通信をさせたい」との相談が山田村役場に持ち込まれた。「生徒は素直であり純真ではあるが、積極性にかけるところがあるので、パソコン通信を取り入れ生徒に刺激を与えたい」という意向がきっかけとなり検討が重ねられた。その結果、特色ある使い方として、パソコン通信よりもインターネットを利用することで山村という狭い地域から抜け出すことができるのではないだろうかということになり、ＮＴＴの全面的なサポートを受けて村全体として取り組むこととなった。夏までには「スキーといで湯の里」というタイトルのホームページを山田村から発信するまでになった。

平成７年秋には、「地域情報交流拠点施設整備モデル事業」という形で国土庁過疎対策の補助事業へ申請を出した。当初、過疎化が進む山田村は、温泉とスキー場を売り物に観光客誘致に力をいれたいと、冬場天候や道路状況、駐車場の空き具合の電光掲示板を村の入り口に作る計画を県庁を通じ補助金の交付申請を提出した。しかし国が構想していた事業内容は、ホストコンピュータやパソコン研修室などを備えた情報センターを地域につくり、生涯教育や福祉

事業の拠点となりうるようなものであった。このとき一時は断念したが、他の地域に先駆けたホームページ作りや中学校の取り組みなどの実績を背景に、山村における電脳化を今後の地域づくりのポイントとして、情報センターの設置、パソコン設置台数の増加を再度要望することとなった。

そうした努力の結果、平成７年１２月国土庁からの補助金が内定し、パソコン配付は「希望する全世帯に」といういわゆる山田村の電脳化計画が一挙に現実味を帯びたものとなった。平成８年始めから「村民と語るつどい」を地区ごとに開き、村民全員の利用をめざしたパソコン配付計画を村民に対して明らかにし、村民への周知と講習会も少しずつ開催されるようになり、着々と準備が進められることになった。

平成８年夏、ついに希望する全家庭（３２０戸：約７割）へパソコンが配付された。ＩＢＭ（機種：アプティバ560）機が約５０台、それ以外はＡｐｐｌｅ社ののマッキントッシュ（機種：7100/80AV）である。

平成８年１２月、山田村の２３の村落における電脳化をサポートする情報センターが完成し、平成９年４月よりようやく本格的に稼働し始めた所である。情報センターの全体構想はあくまで山田村における村民一丸となった電脳化への取り組みであり、当面の計画は、パソコンを配付した全家庭へのインターネット接続と情報センターの拡充の２点であった。

６月には、全家庭に接続が可能となり、今後は、各家庭の村民への教育やサポート体制の拡充がもっとも大きな課題といえる。センターの２・３階には学習と講習のための部屋と練習用のコンピュータが設置され活発な利用が期待されている。

このようにして、山田村の電脳化は、中学校がきっかけとなり、役場とＮＴＴ、そして一部のネットワークに詳しい村民のボランティアから始まったが、これからは情報センターが拠点となって、地区ごとのリーダーを中心に進められていくようである。

２．大騒ぎはじまる

平成８年６月６日の富山新聞、引き続いて６月１１日の朝日新聞の記事が発端となり、またたく間に全国にそのニュースが広がっていった。山田村には、連日報道関係者や様々な視察団が大量に訪れはじめ、役場の担当者はその対応に追われた。また、新聞やテレビで報道されるたびに山田村ホームページを見、役場宛に電子メールを送る人は、うなぎ登りにその数を増していった。

情報技術やインターネットが描く、そこはかとないユートピアを連想させる夢は、人々を引きつける魔力を持つ。多少とも情報技術などの知識を持つ者はとくにその傾向が強い。マスコミ、行政、ジャーナリスト、研究者が大挙山田村を訪れ、好奇の目で見たものを日本中に発信しはじめたことで、村はまるで時代の寵児のごとき扱いを受けるにいたった。新聞、雑誌、テレビ取材で飛び出す見出しは、どれも刺激的で話題性が豊富で大衆を引きつける。「インターネットで村おこし」「山田村インターネット狂騒曲」「村は世界と接続した」「過疎の村にインターネットが人の交流を生む」「情報の宇宙へ」などなど。しかし、そのどれもが、超未来指向、未来暗示型、皮肉り、一過性、過疎や高齢化への一つの対処、活性化、村民の素朴さ、失敗談のちゃかし、行政主導への批判などと紋切り型の紹介に留まっていることが多い。

こうした内容がまったく重要でないというのではない。各論は、経済的機会の可能性、公共サービスへのアクセス方法、文化活動の新しい形式、村当局の発言の内容や性質の変化、国と地方の権力構造の関係、（時代の寵児とされた）こうした経験が日々の生活に与える影響、豊かさや幸せというものの再考など重要な問題を提起している。しかし、電脳化による影響という大上段に構えた議論だけではなく、丹念にその経緯を伝える調査もそろそろ必要ではないだろうか。

最新のデジタル技術が過疎農村社会に与える影響はどのようなものであるのかを考える際、一つの理想的ともいえる取り組み方が、ウィリアム.J.ミッチェルの「シティ・オブ・ビット」（掛井秀一・田島則行・仲隆介・本郷正茂訳　彰国社,1996）のなかに示されている。

『・・・そこで、われわれのなすべきもっとも根本的な仕事は、広帯域コミュニケーション網のためのデジタル回線や電子機器を用意することではない（いずれ手に入るのだ）。ネットワークにのせる「コンテンツ」をつくることでもない。一番大切なのは、どんな人生を送りたいか、どんなコミュニティーで暮らしたいのか、それらにふさわしいデジタルな環境はどのようなものであるべきかを想像し、創造していくことなのである。』

しかし、実際にその渦中に突如放り込まれた村や町が、こうした理想的な考えのもと、十分に準備された中で進められることはなかなかありえない。山田村がこれまでに経験した実状もまさにその例にもれない。

阪神大震災は都市の破壊によって、やり直しの出発点に強制的に立たされて、大規模な社会改造の試みや、社会の論理的な分析が架空ではなくなり実地にこれを行わなければならなくなったからこそ衆人の注目を引いている。山田村は破壊が導因ではなかったが、経済的な原則から離れて用意された情報基盤と情報機器は、純粋に生活の「幸福（しあわせ）」のためだけを考えて「使う」ことを目指すという課題が降ってわいたようにやってきた。しかし幸福のためというような検証に時間のかかることは次第に敬遠され、もっと即効性があり具体性をもった目的に「使う」ためにはどうすればいいのかということが具体的な緊急課題となった。ここにマスコミはもっとも好奇の目を光らしたといえる。

村の生活にコンピュータは「なくてはならぬもの」ではなかったはずである。しかし、突如家庭に進入してきたコンピュータが村の生活に「なくてはならぬもの」に変身しうるに足るものであるのかどうかを性急に求め続けて、議論だけが先走りしすぎていたといえるだろう。

これもあれも、コンピュータが国民の基本的な生活に「必要な（なくてはならぬ）」ものとなりうるものかどうかという社会的に見ても大きな関心を引きつけるだけの理由があったからで、やむを得ない面もある。

もちろん地域の電脳化については中長期的な視点が必要であることは論を待たないが、その取り組みの初期の段階に対して、何らかの援助を講じられるような知識をシステマチックに確立できるような方向を目指した調査研究が今こそ望まれているのではないだろうか。コンピュータが生活に「なくてはならないもの」になるには実は大きなハードルを越さなければならないことにはどういうわけかあまり関心が示されない。現在までのところコンピュータが「使えるようになる」ためには、何らかの教育なり支

援がどうしても必要になる。得てしてこうしたことは導入後しばらく時間を置いた後、次第に強く感じられてくるようである。

以下、村でこの一年間に起こった変化の様子を「支援」という側面から実態を報告する形で述べてみることにしたい。

3．電脳化への模索

村の電脳化構想の一応の建て前は、情報センターを拠点として、村民が「いつでも、どこでも、誰でも」自由に必要な情報を受発信できる環境を整備することで、都会との、また地域内での情報格差をなくし若者定住や地域間交流、交流人口の定着を目指している。また、福祉や医療への活用で高齢者への配慮も行うなど。その基本的な整備構想はどこといって特徴があるわけではない。

・情報センターを設置して、村民自ら築く受信・発信・創造の場としての機能とともに、研修や開放オフィス、情報ライブラリー機能のほか交流拠点としての機能も持たせる。

・ネットワーク機能にはマルチメディアを簡単に取り扱え、伝送路はＮＴＴの一般回線もしくはＩＮＳネットを利用する。

・村民はマルチメディア情報端末を利用し、村内外の各種情報が用意に検索できるようにする。

・その他、緊急、防災等の現場対応のための携帯端末機も備え、独居老人や寝たきり老人の介護（監視）が容易に出来る端末機を考える。気象情報を提供し、農林業などでの利用を図る。村内企業への計算サービスを図る。など。

しかし、山田村の電脳化の推進にもしその特徴があるとすれば、それはきめ細かな支援への配慮といえるのではないだろうか。もちろんこれは最初から計画的に考慮されていたわけではなく、電脳化の過程で自然に構想され必要と感じて実践されてきた結果であるといえる。もちろん幸運にも恵まれたところが数多くあったといえる。

（1）人的ネットワークを利用した電脳化推進

電脳化を進めるにあたって、広くコンピュータの利用を啓蒙していかなければならないのは当然で、それが成否を握る鍵となるともいえる。当然山田村でも役場（行政）主導で電脳化が進められたのであるが、実際の推進母胎となったのは、古くからある村民のネットワークをうまく活用した「パソコン・リーダー」という制度であった。

a）山田村ネットワーク（連絡網）

山田村は各地区毎に昔から深く結ばれており、村全体の連絡などは、役場村長を頂点に各地区代表の総代に伝えられ、総代から各家庭へ連絡される。大きな地区では複数の小総代がサポートする。全体が生活に密着した樹状構造であらわされる村ネットワークをもつ。村の行事やいろいろの連絡は、こうした地区を単位に行われており、長年の生活共同体としての結びつきは強い。

日本の伝統的な村落は、一般に強い共同生活体としての性格をもっていた。新しい情報技術が深く生活に根ざしたものになるには、こうした昔からの共同生活体の存在の価値を見直し、お互いに教え、教えられ、助け合う支援体制を活かしていくことも一つの方向なのではないであろうかと痛感した。

b）情報推進ネットワーク（パソコンリーダ制）

電脳化を推進する機動力となるパソコンリー

ダは、先に述べた２３地区のそれぞれから選出された４５名の男性を中心とした電脳化の担い手である。パソコンリーダはそれぞれの地区の中から選ばれた代表であるため村民にとって気軽な相談相手であり講師である。

とくに、身近な若いリーダーの存在は、これまでにない新しいコミュニケーションを発生させ、学習グループの結成などの方向に動いているという。また、故障や問い合わせの連絡網、質問網も地区のパソコンリーダが基点となり、問題解決コミュニケーション網がわかりやすく整備されている。

尤も、そのリーダー相互間にもコンピュータの経験の度合いや知識に大きなレベルの差があるため、地区毎の格差など難しい面も徐々に表面化し始めている。現在、そのパソコンリーダの教育の途中段階であるがこのレベルアップの教育あるいは意欲の向上も必要であると感じた。

（２）少数のリーダーシップをもったコンピュータ経験者の協力

パソコン利用の普及にあって大きな影響力とリーダーシップを発揮したのは、少数のコンピュータ経験者が積極的に村民に協力したことも大きい。

（３）山田村調査団の変身

山田村にはマスコミはじめ、地方自治体、研究者などの訪問者が後を絶たない。その中で、当初は情報化の研究事例として訪れた学生研究者の一団が、次第にパソコンの利用を助けるボランティアとして活躍するようになった。

（２）、（３）については、第５章で改めて述べる。

４．電脳化の現状と課題

１年前の山田村は動き出したばかりであり、すべてが手探りの状態であった。とくに電脳化を推進する中心となる人達の苦労は計り知れないものがあったのではないかと想像される。また新しい経験に胸躍らせて意外ないきがい感に喜びを感じている人も少なくないと聞く。導入から１年、表面化してきた問題や、試行錯誤の中で理想から次第に乖離してきた現実、さらには新しい発見や体験に心躍らせる人たちについて報じてみたい。

（１）施設、設備の現状と課題

村の電脳化構想には、情報センターを拠点として、村民が自由に必要な情報を受発信できる環境をまず整備することがある。そのために情報センターには通信制御室の他、研修室や情報ライブラリーといった村民が気軽に利用できるような施設を開放し、また、村民はそれぞれの家庭で直接パソコンに触れながらネットワークに参加し、自らが生活の情報を収集できるようにすることをめざし、着実にそれを実現してきた。

情報センターは平成８年１２月に完成し本年４月より専属員が配属されいる。まさに腰を入れて取り組みはじめたところといえる。全国から注目を浴びているという気概が職員の勤務ぶりから想像できる。テレビ電話による健康相談、電子メールでの育児結婚相談、インターネットによる情報発信、同人会活動などが発案され実行されようとしている。ようやく各集落間の地理的不便さを電脳化によって克服できるかもしれないという想いが職員だけでなく住民にも体験から感じとれるようになるまでにあまり時間はかからないかもしれない。

情報基盤については、希望家庭へのパソコン配付とテレビ電話の接続が済み、今年６月にはこれまでインターネットに接続ができなかった家庭も可能となった。現在は、接続のために必要なソフトウェアをＣＤ－ＲＯＭにまとめ、各家庭に配付し、順次接続に取り組んでいるところである。

ただし、コンピュータ・ネットワークは予期できないトラブルを抱えることも多い。また機器の故障や不良といった問題もかなり厄介な問題となってきている。住民への教育とねばり強い説明と協力依頼を継続しつづけることがポイントとなっている。

（２）村民の啓蒙

村としての当面の課題は、パソコンを配付した家庭へのインターネット接続と情報センターの充実（担当者自身の勉強を含め）の２点であり、村民への教育やサポート体制の実際的な検討は今後に先送りしている。現在のところは基本的には各家庭に配付されたパソコンは、個々人の自発的学習と利用に委ねられている。

そうした中で、「ふるさと塾」など村の地域活性化を考えるために企画した勉強会での仲間、パソコンリーダを中心とした人的ネットワークによる集まり、もともと気の合った主婦グループなどによる自主的な新しい学習体制ができ、それが意外と活発なのには驚かされる。中でも、勉強会だけでなくネットワークを通じて全国の学生や一般人と一緒に「電脳村ふれあい祭り’９７」を企画するグループの発生など、村の活性化が（役場主導ではなく）村民中心に始まりかけている点も見逃せない。また、一部には農業や観光業の経営に結びついたホームページを作り将来の発信の準備をする村民もでてきている。（ホームページを参照されたい http://www.vill.yamada.toyama.jp/）

一方、突然のパソコン騒動に、パソコンは使いたいが何をしていいのか、いったい何をすべきか、どうすればいいのかという漠然とした問題に向かい途方にくれる村民も少なくはない。とくに本当に必要性を感じていない人への動機づけや参加意欲の向上にはさらに時間をかけた啓蒙活動が必要となろう。

（３）小・中学校での教育

小学校にもパソコン教室が整備され、パソコンによる授業が行われている。また赤外線ＬＡＮを利用したネットワーク環境も整備されている。中学校は、もとより今回の電脳化の発信地ともなっており、ホームページの充実、国内外を超えて電子メールの利用による実験的学習もやはり注目されてきた。

その中学校はいま、村の中で一番古い設備をもつことになってしまった。さらに村で配布されたパソコンと機種が違うことや、小学校で最新のパソコンで学習した生徒が中学に入学した後のこともこれから問題となるであろう。また、パソコンを希望しなかった家の多くは高齢者の家庭であるというものの、僅かではあるが

写真２　山田中学校
コンピュータ室には、放課後も
生徒たちが自然に集まってくる

若い世代の家庭でも希望しなかった家庭もあり、子供の間での心理的な変化などへの配慮の必要性が先生達の間で話題となっている。さらに教員は山田村、婦中町、八尾町などそれぞれが独自の電脳化を進めている地区に転勤することもあり、教員自身の研究、推進、継続意欲などがそれによって削がれる恐れもある。

こうした問題にもかかわらず、これからの村の活性化を担う若者は素直で元気である。インタビューをした生徒達からは、電脳化への気負いもとまどいも感じられない。子供達は、ごく自然に電脳化を受け入れている様子である。

（4）高齢者への支援

山村の電脳化の目的の一つは、他地域との、また村内での情報格差をなくし人口の定着化を図り、活性化に寄与することである。そのためには、上で述べた壮年や中高年の活躍、子供の電脳化への適応をさらに推し進めている現状と情報センターの整備によって今後一層の効果が得られるであろうことは期待できる。

今一つの目的として、村民全員が利用するという意味の中には、高齢化社会を見据えた福祉への活用がある。パソコン利用での高齢者の福祉には村民あげての関心と協力が必要であるが、高齢者自身も情報機器を利用しようという気持ちも必要である。しかし概して高齢者は、電脳化忌避症候群（情報機器の進歩の早さ、操作のわずらさしさ、新しいものへの回避）に陥りやすいし、現実に陥っている。

しかし、情報機器は、高齢者であろうと身障者であろうと、生活弱者として世の中から取り残されがちな人々にも、それを利用することで生活を楽しむことができる可能性をもっている。ただ、新しい知識や技術を得るには楽しいだけではなく辛いこともあり、そのときどの様な手助けが次への一歩を導く起動力になるか、そのための支援のありようはどうあればよいかを考えることも大切である。

山田村がめざす電脳化の進め方としての、各個人が学習し、家族で助け合い、仲間で勉強しあうという理想図は、様々な問題を抱えながらも古くからある共同生活体としてのネットワークを基盤に若い世代を中心に比較的浸透しはじめているが、高齢者はどうであろうか。高齢者福祉センター「福楽」でその一端を見ることにした。

この施設にも、村民に貸与されたと同じテレビ電話付きパソコン（マッキントッシュ７１００）と電子カメラ、プリンターの各１台ずつが設置されている。これからの福祉に役立つと期待されるテレビ電話は、すでに村内の同じ機種を持つ家庭同士は通信できるものの、異機種間の通信ができないという問題は残っている。

福楽では毎日少しでもお年寄りにパソコンに触れてもらおうと、１～２時間程度をパソコンの時間としている。当初皆でパソコンの周りに集まるようにしていたが、その後高齢者が慣れるにしたがって、２～３人ずつ順番にパソコンをしたり、ビデオをみたり、折り紙を折ったり、歩行訓練をしたりといくつかの作業を並行に実施するように変更した。そのため、個々人のパソコンに対する興味のあるなしや変化がわかりやすくなったという。

職員は忍耐強く高齢者と一緒にコンピュータの前に座り、触れさせることをまず第一としている。キーを一つ押すのに１０分かかっても（それほど長くという意味）いらいらしない。そしてどの様な時にもやさしく対応しているのである。本当に感心する。

・「コンピュータを使って一番困ることはどんなことですか」
「キーとかマウスとかは少し分かってきたが、言葉が全部ぜんぜん分からん」
「年をとっていて目がみえない。文字を大きくしてもらってもよくみえない」

・「コンピュータを使ってみてどう思いましたか」
「コンピュータは、自分だけでなにかできるとは思わないがおもしろい」
「みんなの前では恥ずかしい」
「長生きしたら、びっくりするようなもんにであうちゃ。もっと長生きしたら今度はどんなもんがでてくっかねえ」

・「家でコンピュータを使っていますか」
「孫にときどき教えてもらうけど、だれもいないときはさわらない」
「ここでしか使ったことがない。ここやとゆっくり教えてもらえる」
「１人暮らしだから希望しなかった。でもコンピュータは楽しい。この福楽でコンピュータをさわるのは楽しい。自分が使っても楽しいけれど、人が使っているのを見ているのも楽しい。家にもあったらよかった」

・「どうして家で使わないのですか」
「家でさわろうとは思わない。さわって壊したら家族に迷惑がかかる」
「いまはまだ使えないから」
「まだ、箱にはいったまま」
「回覧板でもなんでも、電話とＦＡＸで済む」
「おらっちゃ、家では使わせてもらえん。なーん別にそれでもいいがや。孫が楽しそうにしとるのを見ているだけでいい」

・「誰が使っているのですか」
「孫」、「子供」、「コンピュータは家がいろいろ使っている。孫が一番。子供夫婦はときどき使っている」

・「家のどこにコンピュータが置いてありますか」
「仕事場」、「広間」、「居間」、「子供部屋」、「陽のあたる所も温度の高い部屋もタバコの煙もダメやといわれたから、廊下のはしっこにあっちゃ」

・（家でパソコンを使っている人に）「テレビ電話は使ってみましたか」
「おもしろい。でもなんか恥ずかしい」「そんなハイカラなもんわしとこにもあるがけ？」

写真３　パソコンの時間を終えて
テレビカメラで写した写真で作成した年賀状を手に、みんなで談笑
「孫に送る荷物にいれてやるんだ」と嬉しそうに話してくれた

（ここに記載した内容は平成８年９月から平成９年２月の福楽におけるインタビューのごく一部である。）

以上の様子や会話の中には、初心者や高齢者が通る小さなハードル（他人の目、家族や仲間への遠慮、知らないもの初めてのものへの警戒心、鵜呑み、利用環境への無関心）が、そしてそれを越えるための少しの手助け（知らないことを恥ずかしがらずに聞ける環境、同じレベルの仲間がいることの安心感、仲間より少し進む優越感、教えてもらいやすい人間関係、何らかの成果物を手にできる満足感）がある。

パソコンを希望しなかったお年寄りも「福楽」では比較的楽しくパソコンを使い、この半

年の間に遅々たる歩みながらも関心をもつ様子が確かにみうけられた。「福楽でパソコンを覚え、誰も教えてくれる人がいない家でも使えるようになってくれたらいい」とは福楽の職員の言である。

一方、福楽職員自身のパソコン学習は、講習会、仲間や家族、訪問者などによっている。当初さし当たっての問題は、これまでワープロで作成していた資料をパソコンに切り替えたいのだが、なにをどうすれば、どこまで以前より便利にできるのかわからないといったことが中心であった。誰かに「できない」と言われたことを鵜呑みにいままで困っていたということもある。訪問者であれ仲間であれ、コンピュータについての知識はいろいろである。自分の知っている範囲で無責任に「教える」という現実は、「教わる」方はその中から適宜自分の問題の解決法を探していかねばならないということでもある。

「マニュアルを読めば明らかなのに・・・」とよく言われるが、学生や身近な知り合いの行動を思い浮かべると、マニュアルは一つの支援ではあるが、多くの初心者にはそれ自体が大きな壁でもあることに改めて気がつく。

身近な問題や関心のある問題の解決に向かって、人に質問し、知り得た知識で試行錯誤を繰り返しながら時間をかけてなんとかそれなりにやり通していく職員の様子には感心すると同時に、学習支援の必要性とその在り方を再考させられた。福楽の職員は、デイサービス（接客サービス）が主要な仕事であるため、実際にはコンピュータ利用には、１日１～２時間程度、数人の高齢者を支援するのが精いっぱいである。さらに、職員が自分のために使えるのは、高齢者を自宅まで送り届けたあと午後４時を過ぎてからか、自宅に帰ってからなので、自分自身の学習がなかなか思うように行かない中で、「少しずつやっていくうちに、これもコンピュータで処理したらいいのではないか、これはどうかしらと考えるようになってきた」ということを聞くとインタビューしているこちらまでうれしい気持ちになる。

福楽では、高齢者と職員、職員相互、ボランティア達が「教える側」と「教わる側」の関係を作り出しはじめている。それぞれの立場で「教える側」と「教わる側」の歩み寄りが成功し問題が解決するさまやその逆の様子は、それら両者の親密度、信頼度、相手への思いやりといった情報技術以前のコミュニケーションの力も大きく左右していることがうかがえる。

５．インターネットは「めだかの学校」

先日、作家の住井すゑさんが亡くなった。彼女は晩年、身体が自由に動かなくなっても、休むことなく勉強会をひらいていた。そして、その勉強会を誰もが先生で誰もが生徒になる「めだかの学校」であると呼んでいた。今、山田村の電脳化は、「めだか方式」でゆっくり進んでいる。

強力なボランティア、パソコンリーダ、少し進んだ人、中学校、小学校、勉強会グループ、家族、隣近所、それに情報センターのそれぞれが互いに助け合ってとにかくパソコンを使っていこう、一番聞き易い人に聞いて勉強し互いに進んでいこうと歩みはじめている。

最近その中に、新しい「めだか群」が参入した。全国の学生による「パソコンおたすけ隊」の面々である。この学生たちが集まって、「電脳村ふれあい祭」という企画をたてた。きっかけは、２月末にさかのぼる。インターネットの

就職関係メーリングリスト仲間ではあるが一度もあったこともない５人が山田村を訪問したことから始まる。話題の山田村を訪問して高度情報化社会を考え、就職にも役立てられたら・・と気軽に考えて、アンケート持参でやってきた。ところが、そこで出会ったものは想像と現実とのギャップであった。最初の、頭で考えていた電脳化したイメージの村をちょっと調査してみようという気軽さと表面的なつき合いでは村に入り込めず、むしろその危険性を思い知らされたという。そしてもっと真摯な態度でコミュニケーションをしたいと考えるようになった。そして、「電脳村ふれあい祭り」の呼びかけへと広がり始めた。その後、少しでも役に立ちたいと集まった学生がボランティアとして村民の活動に協力し、生活に密着した情報化の未来について語りあうイベントを開催することになった。

こうした経過を経た後、今年の７月２６日から祭りが始まっている。多い日には１００名の学生が山田村に集まっている。もちろん全員がおたすけ隊というわけではない。ふれあい祭りは村民の協力を得て企画がどんどん広がり、祭りを楽しむだけという学生もいるが、とにかく村の人とコミュニケーションを図りたいという学生の熱気がひしひしと伝わってくる。

山田村の電脳化は「互いに助け合う支援」というスタイルを次第にとっていったのであるが、それを名実ともにひっぱっているリーダーたちがいる。

＊強力なボランティアの倉田さん

「今一番大事にしたいのは、自分たちにも出来るのだという村民の気持ちなんです。」と村で機械設計事務所を営む倉田さんは語る。倉田さんはもともと山田村出身で、一旦は村を出ていたが数年前にＵターンし、今では山田村を拠点にしてネットワークを利用した在宅勤務を実現している。これまで培ってきた倉田さんの人的ネットワークによる情報収集と「山田村に真に必要な情報化」を求める気概は、山田村のネットワーク事業に欠くことの出来ない力であり、今も村の電脳化キーパーソンとして活躍している。

希望する家庭があれば、村中の一軒一軒を駆け回り、パソコンの設置からソフトウェアの使い方まで丁寧にサポートする倉田さんの姿に、少しずつ熱い信頼が寄せられ、徐々にリーダ格となる村民も育ち始めている。「ぬきんでたリーダではなく、村民と一緒に将来を考え進んでいける人が村に必要なのです。」という倉田さんの考え方は、山田村の電脳化の基盤となっている。

＊情報センターの岩杉さん

村の情報センターは、念願の全戸へのネットワークの接続が可能となり、様々な教育の企画や村としての進み方を村民と一緒になって模索しはじめている。情報センターの３階の研修室は、パソコンリーダの講習会や村民の有志らがあつまっての勉強会に頻繁に使われている。その情報センター長である岩杉さんは、「役場やセンターが引いたレールにのった情報化では意味がない。ゆっくりでも村民同士が日常生活の中で学びあって欲しい。」といい、キーパーソンとなる人やこれからやってみたいと思い始めた人をサポートするという姿勢を意識的にとっている。それは、本人まかせという意味ではなく、村民個々人の意識やタイミングにうまくサポートが出来るような情報センターをめざしているのである。もちろん問題は山積みである。村の情報化が進むにつれて村民からのセンター

への要望も増え、一方ではパソコンは1年前のまま箱に入っている家もある。それでも、その家の人が「ひとつやってみるか。」と思える状況を時間がかかっても築いていけたらーと熱く語ってくれる。

＊パソコンリーダー

山田村めだか教室には特定の部屋はない。ある時は隣の家の居間であったり、ある時は自分の家の台所であったり。山田村民のほとんどがコンピュータ利用の体験を同じスタート地点から始めた。しかし、興味や関心、慣れ、年齢などさまざまな要素が、コンピュータへの関わり方や度合いの差を生んでいる。当初からそうしたことは当たり前なのだという想いから、各自がやりたいと思った日から徐々に始め、わからなくなった時は、「近くの人」が助けるという自然体が今も続いている。また、当の教えるべき本人もわからなかったら、また別のわかる人に聞こうというなんとも長閑なところがある。

とは言っても、なにもかも初めてのこと。パソコンが導入されてすぐに、各２３地区の中から、少しパソコンを使ったことのある人や興味のある人を互いの推薦で選び、パソコンリーダーを決めた。とにかく困ったことがあったらパソコンリーダーに聞こう。そのパソコンリーダも初心者だけれど、パソコンリーダもわからなかったら他の知っている人にきこう。それでも分からなかったら、メーカのお客様サービスに聞こう。という一応のシステムができあがっている。

パソコンリーダは固定されたものではなく、時間が経過するにつれて人が入れ替わった地区もある。また、パソコンリーダ以外に少しずつ地区のキーパーソンとなる者も現れはじめている。もちろん地区ごとの差もある。しかし、それについてもあせらないで徐々に進んでいこうとしている。

＊こうりゃく隊

学生が「電脳ふれあい祭り」の企画を持ち込んでから、村民の対応は早かった。役場や情報センターではなく、「えんなかくらぶ」という村の仲間が学生の後押しをしようと立ち上がったのである。ふれあい祭りは学生だけでは成り立たない。村民との親密なコミュニケーションがあってこそのものである。そして徐々に、様々なグループや仲間がそれならもっと祭りのために「こうりゃく」（山田村の方言で手助けとか支援するという意味である）しようということで、祭りのための「こうりゃく隊」が結成された。

学生がボランティアとして村民の活動に協力したいという気持ちを受け、こうりゃく隊は学生と村民が一体となって楽しめる山田村ならではのイベントを次々に企画し始めた。その後電子メールやメーリングリストをフルに活用して祭り作りが始まった。こうりゃく隊は、３３名であるが、実際には先に述べたパソコンリーダや家族・友人を含めると非常に多くの村民が祭りのために「こうりゃく」している。

＊パソコンお助け隊

「電脳ふれあい祭り」は多くの企画が同時並行的に実施されたが、その多くの中でも祭りの原点とも言うべき企画が「パソコンお助け隊」である。この企画は、ふれあい祭りの期間中にパソコンで困っている家やまったく使っていない家、ネットワーク接続ができない家などへ隊員が伺い、話をしながら手助けしようというものである。基本的に初心者への手助けである。

パソコンお助け隊を希望する家庭やその内容、利用度などについての聞き取り調査は、各

地区のパソコンリーダーが事前に実施した。予想を上回る７０件以上の希望者がでて連日てんてこまいである。２～３人のチームを組んで夕方６時から８時までの予定であるが、定刻に終わることはまずない。チームのメンバーは、それまでのコンピュータ経験の年数や利用内容のアンケートをもとに希望家庭の状況と照らし合わせて決められるという具合である。

写真４　パソコンお助け隊の様子（１）
興味も操作も子供たちにはかなわない
家族中が接続したホームページに集まる

写真５　パソコンお助け隊の様子（２）
道案内のパソコンリーダとともに訪問
大自然の中で開放的
庭からは遠く富山市街の瞬く光が見える
柱や襖は総漆ぬりの古く立派な家が多い

学生達は、訪問した家庭の状況やサポートした内容を持ち帰って、夜にミーティングを行う。さまざまな問題点や新しい発見を話し合い、反省しながら次の日の訪問の糧としていく。サポートをしながら実は多くのことを体験から学んでいるのである。

６．あとがき

学校はよきにつけ悪しきつけ、学生や生徒をアトム的な個人として、ある程度孤立した状態で正確な知識を伝達することと理解を支援することを本務としている。一方、社会生活を営む個人は孤立した個人として生活するというよりも、共同する個人、共同関係をもつ社会的個人として考えなければならない。学ぶ形態も経験による場合がほとんどで、他人の経験から学ぶ機会も多いし、それぞれが持つ経験も質量とも様々であることかから、知識そのものが自足的ではなく相互に補い合うことのほうが中心になっている。学校では知っていることを他人に（できれば文字や口頭なりで）説明できることがなによりも重んじられる。

一方、社会生活では、お互いが共同し、互いに教え合って、経験をも共同し、場合によってはこの共同経験の範囲を拡大しようとするかもしれない。しかし、わからない人がいればわかっている人が黙って手を引いてコンピュータの前まで連れていき「こうやってやるんだよ」と行動で示したりする。また、どうしても、見ればわかることも多いので、「見る」ことがすなわち「知る」ことになってしまって、それ以上深く知ろうとすることも少ない。これでは教え教えられることがその場限りになってしまい

やすく、言葉で説明して納得させるというようなことは無用だという風潮に陥りやすい。習熟してしまえばそれで用は足りたとしてしまわれる。その結果、残念ながらこうした知識や貴重な経験は、これを組織し整理されてきっちりとした形で残されていくことは少なくなってしまう。

日常的な活動のなかで行われる問題解決は、その人が生活する状況や環境に大きく依存している。こうした状況や環境に対するきめ細かな観察と考察がなければ、コンピュータがどう利用されるか、コンピュータにいかに慣れてくるのかは決して見定められるものではない。これまで見たきたように、状況や環境のなかには、当事者が他者からどのような支援が受けられるのかということも含まれていて、それが結果や進捗に大きく左右すると考えられる。人が何か初めてのことに挑戦しようとする場合、当人がそこで直面する困難に、他者がいかに対処しやすくしてやるかについては様々なシステムが考えられる。例えば、学校教育のように日常的な生活状況から少し離れた場所で、問題解決の訓練を行うというシステムが確かに確立されてはいるが、山田村の例は、日常的な活動の場で様々な支援体制が期待され、それがうまく行っているケースと呼べるのではないか。普通は、そうした支援がうまく得られずに活動が挫折していくケースも多いのではないかと想像される。

山田村のように幸運にもこうした支援の機会が得られたとしても、必ずしもうまくいくという保証はないかもしれない。こうした支援を何とか体系化した知識としていつでもだれもが利用できるように作り上げられていればどんなに心強いことであろう。できれば研究者や調査する者がこうした経験を一般的な知識の形で残すことを考えるべきではないだろうか。しかし残念ながら、現状では有効な研究方法も対策手段も体系的に研究されてこなかったというのが実態である。ただし最近、認識の社会・文化アプローチと呼ばれる一群の研究が、こうした問題に対する分析の手がかりを与えつつあるように思われる。山田村における「支援の社会・文化・歴史的特性」については、いま調査中ではあるが、山田村特有のパソコンリーダ制などにみられる学習の方法は、自然で実際的な新しい学習の支援の在り方の一つではないかと思われる。

謝辞

約1年間の訪問に亘り、何度も快くお会いして話をしていただいた倉田さん、情報センターの岩杉さん、福楽の丸山さんをはじめ職員の皆様、こうりゃく隊の皆様、山田村在住の高岡短期大学庶務課の杉本さんと奥様の明美さん、他山田村の皆様に深く感謝いたします。